

二〇世紀が戦争の世紀であつたのに対して、「二十一世紀は人類の平和と希望の世紀だ」と宣伝せられていました。二〇〇一年ニューヨークの九・一一事件でこの夢想は吹っ飛びました。アメリカの強引なテロ対策による、アフガン、イラクの壊滅、イスラエルとパレスチナの終りなき殺し合い、その他いちいち私どもの耳目には触れませんが、世界中のあちこちで殺し合いが行われています。しかもその凄惨さは年を追うて、エスカレーターしているのです。「どうして神さまは、人間の愚かさに限を設け給わなかつたのか！」とのアデナウアーさんの嘆きも、むべなるかなであります。

ノルウェー政府の熱心な仲介によつて、一九九三年八月二〇日イスラエルとパレスチナ解放機構との間に「オスロ合意」が結ばれ、イスラエルとアラブ

国家との関係正常化に、大いに期待がかけられたのです。ところがです、皆さん信じられますか？その途端にイスラエル、パレスチナ両国のテロ行為が激化したというのです。言葉はきついようですが、両国の紛争を喜ぶ人たちがゴマンといふことでしょうか。平和になつたら困るのです。テロ行為をする人たちは、自分の信念でやっていることでしょうか、果たして、人のいのちを無視してもよいほどの、正しい信念があるものでしょうか？なんと人間の愚かさには下限のないことでしょうか！

怨むことなき教えを仏教となし、諍うことなき教えを仏教とす 『雑宝蔵経』

と言われおられます。生かされていると言う、受け身の喜びが味わえますと、無暗に

喜びが味わえますと、無暗に



佐藤 園江
(安芸南組仏婦会長・西教寺仏婦会長)

子育てサポート ～視点を～ 家庭でいのちの教育を②

前号の内容
一、個人差が大きい
二、母の亡い子二人の思い
三、家庭でいのちを見つめる
●まずいのちの誕生です

●つぎは食へるよと、食事の場です。

敗戦後六十年、戦後の食糧不足時代に始まった学校給食が、今ではすつ

人と争うことが、空しいことのように思われます。他人と争うどころか、仏教の喜びを身につけた人は、「心多歡喜」(このころによるこびが多い)「知恩報徳」(ご恩を知りご

子育てサポート ～視点を～

かり定着してきました。どうかすると食事指導は学校教育の中で進めるよう頼りきっている家庭さえみられます。子どものいのちを育てる大切な食事の場が一部とはいえ学校に移つてしまつたというのに、時代でしょうか、親の方は気にかけていません。むかしの子どもは、近所でおやつをいただく親に見せてからいただいたものでした。子どものおなかに入るものは、いのちに関わるものだから親が責任を持つとしたようです。食事の挨拶はかなり多くの場所できちんとできているようですが、それぞれの家族が生活の中で習慣づけておられるにむくいよう)「常行大悲」(二)報謝をたせていただくの三つのころをいただくのだと、親鸞さまはおっしゃるのです。(未完)

るからでしょう。ところで、「いただきます。」「やごちそうさま。」「は誰に向かつて言うのでしょうか。ごほんをつくつて下さった人、米粒からごほんになるまでには八十八回人手がかかっているのだからたくさんの人に感謝していただくこと子どものころ教えられました。よく考えてみると私ども人間がいただいている食物は、他の生物のいのちそのものです。生命力を持った動物や植物を人間につごうのよいように調理して食へる。食へることで人間はいのちを保ち、成長していけるのです。「いただきます。」「の挨拶は、これからのいのちをいただく目の前のいのちに対する挨拶だったので。家族の方が適切な場で食事の意味や挨拶の言葉とも合わせていのちをいただいている。話を話して下さると、姿勢も正し、食へ残しもしない子どもに育つでしょう。いのちの教育では場をとらえて感動的認識をさせることが大切だと思います。家族だから